

## 幼児の主体性の教師評定尺度の作成 (1)

筑波大学心理学系 新井邦二郎

A teacher's rating scale of independence for infants

Kunijiro Arai (Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan)

The present study assumed that independence in infants was composed of trust, image and conflict. Therefore, this teacher's rating scale was consisted of three subscales, i.e., trust, image and conflict subscales in correspondence with independence components.

A total of 622 children of four and five years completed the scale twice and its component traits were examined. Factor analysis produced three factors corresponding to the subscales. This scale was found to have high reliability in internal consistency and stability.

Key words: independence in infants, trust, image, conflict, teacher's rating scale

### 問題と課題

#### 今日の幼稚園教育と発達心理学の課題

現在、全般的な少子化のなかで、各家庭のなかの親の子どもに対する期待は、ますます大きくなっている。しかし、残念なことに、こうした親の期待は、現代社会を反映して、子どもの心の内面の充実や発達よりも、子どもの外形や外観に向けられていることが多い。すなわち、子どものやさしさや真のたくましさ、情緒や意欲といった心の内面の成長よりも、「難しいことができる」、「早くできる」、「上手にできる」ことなどを、親は子どもに、いっそう強く期待するようになっていく。

幼稚園も、こうした子どもの外形や外観に対する親の期待や要求を受け入れ、あるいはときには、先取りして、「外形をつくる教育」をますます強めている。幼稚園は、小、中学校、高校ほど、その教育が画一化されておらず、子どもの発達や地域の実態に応じて教育の内容や方法がさまざまであり、「特色ある教育」づくりが、盛んに行われている。しかし、実際には、その「特色ある教育」の少なからずの部分が、「外形をつくる教育」になっていることは、不幸なことである。幼稚園によっては、文字や数量の一斉指導のみならず、英語や漢字、俳句やパソコン、それに茶道や礼法を教えるところもある。とくに、体育や絵画、音楽などは、専門の講師を招いて、

それらの成果の発表会を盛大に開催している幼稚園もある(森上, 1985)。

幼稚園は、こうした「外形をつくる教育」を行うため、必然的に管理的教育、効率的教育、訓練的教育の度合いを強めている。これらの教育は、三位一体のワンセットである(新井, 1988)。すなわち、子どもの外形を効率よくつくるために、子どもを管理して訓練をする。このように、今日の日本の幼稚園教育は、大きな危機を迎えていると言えよう。

発達心理学は、以上のような幼稚園教育の現状を作り出してきた責任の一端を担っていると考えられる。少なくとも、その責任には、3つの局面がある。

まず第1は、アメリカとソ連との冷戦構造が世界の政治構造となった昭和40年代前半ごろから、教育によって優秀な人材をつくる課題を前にして、米ソを中心とする各国において、教育の現代化が叫ばれたことは、周知のとおりである。こうした流れのなかで、発達心理学の研究は、年少の子どもに対して教え方を工夫すれば、困難な内容のものでも、学習させることができることを明らかにした。例えば、そのような研究者の代表として、アメリカの Bruner, J.S. (1960, 1966) やソ連のヴィゴツキー学派の Гальперин, П. Я. (新井, 1973) の名前をあげれば、十分であろう。この研究は、必ずしも幼稚園教育の改変を意図して行われたものではなく、学

習心理学的な関心, すなわち知識の習得のメカニズムに主な関心があったと言えよう。しかし, 研究の結果は拡大的に解釈され, 「教えれば, 幼児はなんでも学習し, どこまでも伸びる」といった信念が, 幼稚園教育の関係者のなかに広がっていった。「教えればできるようになること」と, 「教えることは果たしてよいことか」「どういう教え方をすれば, 子どもの発達にとって好ましいか」(新井, 1980)ということとは, 区別して考えていかなければならないという一部の人の声は, 大きな現実の流れのなかで隅の方に追いやられてしまった。

発達心理学の第2の責任は, 幼児期の発達にとって, 何が基本的に重要なのかという研究が不十分であったことである。今日の幼稚園教育のように, 子どもの知識や技能ばかりを優先し, 心の内面の成長をおろそかにするするような教育が, 幼児期の発達からみて, 望ましくないという直観的判断は, だれもが持つであろう。しかし, 実際には, そのような教育が具体的にどのようにアンバランスな発達を子どもにもたらしていくかを説得的に示すような研究や発達理論が存在していないのである。Erikson, E.H. (1950, 1959)の自我の発達理論が, 不十分さを持ちながらも, 現在, このことに唯一参考にし得る学説という現状である。幼児期の発達にとって, 何が基本で, 何が枝葉なのかを明確に示すような研究がいまもって必要とされよう。

発達心理学の第3の責任は, 幼児の心の内面の発達を明瞭に示し得るような測定用具を開発してこなかったことである。「外形をつくる教育」がこのように広がってきた事情として, 外形は親によく見え, 理解されやすいが, 心の内面は見えにくく, その発達が理解されにくいことをあげることができる。幼稚園は, 親にわかりやすい外形を中心に指導をし, その成果に親も満足をするのである。しかし, 幼児の心の内面は, 教育する側にも分かりにくいし, ましてや親やそのまわりの人には, もっと分かりにくい。幼稚園が, それを真剣に取り上げて, 親に理解されるとは限らない。それゆえ, 幼稚園教育の重点が, 心の内面から外形へと徐々に移動していったと考えられるのである。このようなことから, 幼児の心の内面の発達を明瞭に映し出せるような用具の開発の必要性が理解できるであろう。

本研究は, こうした問題意識を背景に, 幼児期の発達の主要なもの, 主体性の発達にあると仮定し, その主体性の発達の尺度をつくることを目的とした。

## 幼児の主体性

主体性という言葉は, 一般的に, 心理学ではまったくと言ってよいほど, 扱ってこなかった。しかし, 教育の場では, たびたび使用されている言葉である。例えば, 幼稚園から高校までの現行の教育課程の基準を示した, 昭和62年の文部省の教育課程審議会答申のなかにも, 「基準の改善のねらい」の第2として, 「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視する」ことがあげられ, さらにその説明のなかで, 「生涯にわたる学習の基礎を培うという観点に立って, 自ら学ぶ目標を定め, 何をどのように学ぶかという主体的な学習の仕方を身に付けさせるように配慮する必要がある」と述べられている。また, 平成2年度から実施された新幼稚園教育要領においても, 「幼稚園教育の基本」の第1に, 「…幼児の主体的な活動を促し, 幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」が指摘されている。主体性という言葉そのものではないが, 「主体的に」「主体的な」という表現をどうして, 子どもの主体性が今日の教育の重要な目標として取り上げられていることが分かる。

一般に, 主体性は, 「主体的であること, またそういう態度や性格であること。ある活動や思考等をなすとき, その主体となって働きかける様, 他のものによって導きかれるものではなく, 自己の純粹の立場において行う様」(広辞苑), 換言すれば, 「自分の意志・判断によって, みずから責任をもって行動する態度のあること」(大辞林)という意味に使用されることが多い。本研究においても, 上述の意味において用いていくが, 心理学的に整理して次のように定義をしておく。すなわち, 「主体性は生活的, 社会的場面において, 自分の判断や意志に基づいて, 行動を開始したり方向づけたり, その調整を行おうとする性質」とする。要するに, 「自我の成熟・確立」, 「自分自身の主人公になること」が, 主体性の発達であると理解できる。

主体性の類語に, 自主性という言葉がある。自主性という言葉も, 一般的に心理学ではそれほど使用されないが, 教育の場ではよく用いられているものである。これら2つの用語は, ほとんど同意味に用いられているが, 使われる文脈に微妙な差異もある。本研究では, 主体性のほうが自主性よりも子どもの自我の確立とかかわりが深い考え, 主体性のほうを用いることにした。

幼児の主体性については, 平井ら(1979~1982)の大妻女子大学グループが, 「幼児の自主性の発達」という研究テーマのもとに, 研究を重ねている。同グループの研究の特徴は, 自主性を自発性と自律性

とに分けているところである。このうち、自発性のなかに主体性や独立心が含まれ、その具体的なあらわれが、探索や冒険、けんかや反抗等にみられるとしている。一方、自律性は自己統制と同義語で、自己の言動を他者との関係で反省し、欲望に支配されないものとしてとらえている。また、この自律性は、他者からの受容をとうして得られる共感性と自己主張との葛藤や悩みとに深くかかわるものとしてとらえられている。さらに、同グループは、「幼児の自主性の発達に関する行動評定(6歳児用)」を作成しているが、その行動評定項目として、①課題への取り組み方、②遊びへの取り組み方、③挑戦性、④集中性、⑤独立性・自立性、⑥言語的自己表現、⑦自発性、⑧探索活動、⑨好奇心、⑩創造性、⑪自制、⑫責任感の12項目をとりあげている。

斎藤ら(1985~1988)の鳴門教育大学グループも、幼児の自主性の発達を研究し、幼稚園での生活や遊びのなかから、自主性にかかわる行動として、12の項目をとりあげている。すなわち、①自発性、②知的判断力、③自制心、④活動性、⑤自立心、⑥挑戦心、⑦主体性、⑧責任感、⑨自己表現、⑩協調性、⑪友情、⑫好奇心である。

なお、幼児を対象にしていないが、石川・藤原の標準検査「自主性診断検査(小5~中3対象)」では、自主性の因子として、①独立性、②主体性、③自律性、④自発性、⑤自己主張、⑥判断力、⑦自己統制、⑧責任性、⑨役割認知、⑩独創性をあげている。

以上の研究は、いずれもメイン・テーマとして自主性の用語を使用しているが、これは主体性を非常に狭く理解していること、および従前は、子どもの発達にかかわる言葉として、主体性よりも自主性のほうがより自然に受けとめられてきたことに関係すると推測される。

また、上記の研究は、いずれも幼児の主体性を平板的に分析しており、幼児の発達過程のなかで獲得されていくという側面への考察が不足していると考えられる。例えば、Erikson, E.H.(1950)が指摘しているような、誕生から幼児期終了までに子どもが得ていく発達の内容に関する言及がまったくみられないことを述べておきたい。

さらに、上記の研究の「幼児の自主性の尺度」は、いずれも幼児の心の内面的過程よりも外にあらわれた行動をとりあげている。例えば、「自分から進んであいさつをするか否か」のような項目は、子どもが他者とのかかわりを積極的に持とうとしてあいさつするのか、あるいは教師から注意されるのかいやだから、催促されなくてもあいさつをするのかを区別していない。確かに、外の行動による評定は、観

察しやすく、実施しやすいという利点をもつ反面、それが子どもの心の内面とどのようにかかわるかを定かにできないという短所のあることを認識することも重要である。

### 本研究における主体性のとらえ方

幼児の主体性をとらえようとするとき、次のような2つの視点が重要と考えられる。

①大人の立場から子どもの主体性をとらえるのではなく、幼児が主体性をどのように獲得するのかという発達の視点。

②子どもの外にあらわれた行動だけでとらえていくのではなく、幼児の心のなかに生じている過程からとらえていくという内面の視点。

以上の視点に基づいて、本研究は、幼児の主体性を①信頼感、②イメージ、③葛藤の3つの要素から構成されると仮定した。

①信頼感…Erikson, E.H.(1950)の言う信頼感とほぼ同じ。子どもが、ある場面において行動を開始したり、修正したりする場合、まわりの人の対する信頼感は極めて重要な要素となる。自分の行動が、まわりに受け入れられる(はずである)という信頼感のもとに子どもの自発性が発揮され、また他者との信頼感から自分の行動の善し悪しを問うという自己統制も生まれてくる。この意味で、信頼感は主体性の最も基礎的な内容と考えられる。

②イメージ…Piaget, J.(1936)によれば、1歳半ごろからイメージが本格的に機能し始め、過去のことだけでなく、これから自分が行おうとすることのイメージもできていくという。3歳ごろからあらわれる象徴的遊び(ごっこ遊び)は、そのイメージの旺盛なあらわれとみることができる。Erikson, E.H.(1959)も、幼児期のこのイメージ活動を重視したように、幼児は、これから行おうとする行動に対して自分のイメージを持つとき、意欲を含めて自発性を発揮できるとともに、行動全般も調整できるのである。

③葛藤…自己の欲求やイメージに基づいて幼児が行動を起こすとき、自分の欲求やイメージと、親やその背後にある社会の欲求やイメージとの違いに気づくようになり、どのようにしたらよいのかを自分で考える葛藤を持つようになる。こうした葛藤を持ったとき、自分の欲求やイメージを常に優先させたり、反対に他者の欲求やイメージにただ従ったりするのではなく、その両者をともに受容し、それらを調整し解決していくことが、すなわち自律性(自己統制)ととらえることができる。この葛藤は、Erikson, E.H.(1950)が、指摘するように、幼児前

期において子どもの身体的部位において始まるが、幼児後期においては子どもの生活的、社会的場面にも拡大し、発展していく。

以上のように、本研究は、幼児の主体性を信頼感、イメージ、葛藤の3つの要素から構成されると仮定し、その3つの要素を下位尺度とする教師評定尺度の作成を行った。

## 方法

### 被調査者

埼玉県内の公立幼稚園に在籍する4歳児288名、5歳児334名、計622名。

### 評定項目

幼稚園における子どもの活動を①生活、②自由な遊び、③課題活動の3領域に分けて、とらえることは、広く認められているところである(大場, 1971)。本研究も、この分類に従い、3つの各領域から、さらに3つの活動場面を抽出・選択し、それらと主体性の3つの要素とを組み合わせ、計27の評定項目を作成した(Table 1 参照)。さらに、各項目ごとに5段階の記述評定尺度を設けた(Table 2, Table 3, Table 4 参照)。

これらの評定記述は、それぞれの場面において、幼児の主体性がどのように示されるかを、単に行動としてのあらわれだけでなく、子どもの心の内面に

かかわるものも含んでいる。いずれの項目においても、(a)は主体性の各要素が最も示されているもので、反対に(e)は主体性の各要素が最も示されていないものとして段階づけた。一例をあげると、信頼感の項目1の「協同で使ったものを片づけるとき」では、信頼感が最もみられるものとして「他の友だちに片づけるようにおだやかに呼びかける」を設定し、中間に「他の友だちが一緒にしないと攻撃したり、あきらめて一人でしようとしたりする」をはさみ、最後に最も信頼感が少ないものとして「片づけを友だちに呼びかけもしないし、呼びかけられても関心を示そうとしない」を設定している。これらの評定項目は、5人の幼稚園教師に、自園の幼児の事例を提出していただき、主体性の各要素や各活動場面での子どもの実態やそれにかかわる教師の保育の視点等を議論して決めていった。なお、予備調査の段階では(4歳児、5歳児190名実施)では、評定段階は3段階であった(aとeとその中間)。しかし、予備調査の結果を検討して、3段階では粗すぎるという結論になり、5段階にするとともに、記述内容も部分的に適切な表現に改めた。

### 手続き

実施時期…2回、8か月の間隔期間において同一の幼児に実施された。1回目は、平成1年6月(学年の始まり)。2回目は平成2年2月(学年の終り)。計9幼稚園に調査を依頼。調査依頼から回収までのおよそ3週間の期間に、クラスの担任教師に各項目について幼児の観察を行い、その結果に基づいて評定を行っていただいた。

なお、評定の段階を次のように得点化した。a-5, b-4, c-3, d-2, e-1。

## 結果と考察

### (1) 尺度の因子構造

1回目の4歳児、5歳児の27項目すべての評定結果に対し、主因子法による因子分析を行い、さらにバリマックス回転を行った。Table 5に、その結果の概略を示してある。

このTable 5により、信頼感No. 8やイメージNo. 1, 2, 3, 葛藤No. 5, 6などにおいて、それぞれ因子1, 2, 3の因子負荷量が小さく、それゆえ、各因子がすべての項目と対応しているわけではないが、おおそ因子1が信頼感に、因子2がイメージに、因子3が葛藤に対応していることが読み取れる。

Table 1 評定項目の位置づけ

領域	主体性の要素			
	活動場面	信頼感	イメージ	葛藤
生活	片づけ	項目1	項目1	項目1
	当番(着脱)	項目2 (当番)	項目2 (着脱)	項目2 (当番)
	手洗い(朝のあいさつ)	項目3 (朝のあいさつ)	項目3 (手洗い)	項目3 (手洗い)
自由な遊び	砂遊び	項目4	項目4	項目6
	鬼遊び	項目5	項目5	項目5
	ごっこ(ままごと)	項目6 (ごっこ)	項目6 (ごっこ)	項目4 (ままごと)
課題活動	製作(空箱等)	項目7	項目7	項目8
	ゲーム	項目8	項目8	項目7
	劇的な活動	項目9	項目9	項目9

Table 2 信頼感の評定段階と記述

項目番号	領域	活動名	評定段階	内 容
1	生 活	共同で使った物を片づけるとき	a	ほかの友だちに一緒に片づけるようおだやかに呼びかける
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	ほかの友だちと一緒にしないと、攻撃したりあきらめて自分一人ですようとしたりする
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	片づけを友だちに呼びかけもしないし、呼びかけられても関心を示そうとしない
2	生 活	当番活動を行うとき	a	みんなと一緒に楽しみながら当番活動を行う
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	当番を一緒にする友だちを無視して一人だけで行おうとする
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	先生や友だちにさそわれても関心を示さない
3	生 活	朝のあいさつを友だちと交わすときに	a	目を見て、にっこりと親しみをこめて行う (あいさつの言葉の表現にはこだわらない)
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	友だちからあいさつをうけると関心を示す
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	にっこりともせず、目をそらして、友だちに関心を示そうとしない
4	自由 な遊 び	砂遊びをしているとき	a	自分の意見を言ったり、友だちの意見を聞きながら友だちとのかかわりを深めようとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	自分の意見ばかり主張するが、友だちとのかかわりを切らないようにする
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	自分の意見ばかり主張したりして友だちとのかかわりをこわしてしまう
5	自由 な遊 び	鬼遊び等をするとき：遊びの名前( )	a	遊びの輪のなかに友だちを積極的に入れようとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	自分から「いれて」と言って遊びの輪のなかに加わろうとする子は入れるが、他の友だちをさそったりしない
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	一緒に遊ぶ友だちが新しくふえるのをいやがり、入れない
6	自由 な遊 び	ごっこ遊びをするとき	a	自分の役割にひたって、遊び相手に応じた受けこたえをしながら遊びをすすめる
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	不平を言ったり、先生につげ口をしながらも、自分の役割をしようとする
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	友だちの受けこたえに関心をもたなかったり、自分の役割をしようとしなかったりする
7	課 題 活 動	空箱を使った製作のとき	a	自分の表現方法をもちながら、友だちの表現の工夫したところに興味や関心を示し、そのようにつくりたいという気持ちがみられる
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	教師が高い評価をあたえた友だちの表現には関心を持ち、取り入れようとするが、それ以外には関心を示さない
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	友だちの表現の工夫したところなどにまったく関心を示そうとせず、自分のなかだけの表現で満足する
8	課 題 活 動	学級全体で行うゲーム名( )	a	負けた場合、残念な態度を見せたりするが、ゲームを楽しく続けていこうとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	負けた場合「○○のせいで負けた」と個人攻撃などをするが、ゲームを続けていこうとする
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	負けた場合、個人攻撃をしたり、不平不満を言ったりして、ゲームからぬける
9	課 題 活 動	劇的な活動をするとき(ペープサートなども含める)	a	自分の出番以外でも、友だちの役を興味や関心をもって見ようとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	自分の出番近くなると、友だちの役に興味や関心を示そうとする
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	友だちの役に興味や関心を示さず、ずっとふざけていたりする

Table 3 イメージの評定段階と記述

項目番号	場面	活動名	評定段階	内 容
1	生 活	片づけをするとき	a	片づけの必要性・順序・整理の仕方をわかって、ていねいに片づけようとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	片づけの仕方を理解していない、ただ片づけをしようとしている
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	教師や友だちにうながされて、やればよいというような片づけをしたり、ときにはしない
2	生 活	衣服の着脱のとき	a	次の活動を楽しみにしながら、てきぱきと順序よく着替えようとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	次の活動の目的意識がなく、だらだらと着替えようとする
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	教師にうながされないと、着替えようとしな
3	生 活	おやつやお弁当の前に手を洗うとき	a	自分から手のよごれをていねいに洗いおとそうとし、きれいになったことを喜ぶ
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	自分から手を洗うが、ていねいに洗おうとしない
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	教師から注意されないと、よごれをきれいに落とそうとしない
4	自由な遊び	砂遊びをするとき	a	自分なりのイメージをもって遊びに着手し、そのイメージを発展させていく
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	自分のイメージを持って遊びを開始するが、発展がみられない
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	自分なりの遊びのイメージを持たず、友だちの模倣に終始したり、言いなりになったりしている
5	自由な遊び	鬼遊びをするとき：遊びの名前( )	a	新しくルールをつくり変えたりして、遊びを楽しくしていこうとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	新しくルールをつくりかえようとする気持ちがみられるが、それが友だちにうまく伝えられない
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	友だちにさそわれるままに参加しているにすぎない
6	自由な遊び	ごっこ遊びをするとき	a	場のイメージをふくらませ、豊かにするように、場の設定や教具を工夫して遊ぶ
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	場の設定や教具の工夫が見られず、遊びの内容が発展していかない
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	場のイメージがみられず、遊びがすぐ終わってしまう
7	課題活動	空箱を使った製作のとき	a	自分なりの目標をもって、熱中して取り組み、素材の特質や技術が伴わなくて思いどおりに出来ないときいだつが、それでも考え工夫しようとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	自分なりの目標をもって取り組むが、その後、工夫がみられない
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	友だちの製作をまねして、簡単につくってしまう
8	課題活動	ゲームのとき	a	ゲームのルール(条件)について教師に提案したりしてゲームをより楽しくしようとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	自分なりのゲームのルール(条件)を持っているが、積極的に提案を行わない
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	教師や友だちに指示されるままにゲームをしているにすぎない
9	課題活動	劇的な活動のとき	a	その子どもなりに役になりきって、表現を工夫し、活動をより楽しく充実しようとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	その子どもなりにその役をやるようとしているが、表現の工夫がみられない
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	与えられた役になり切ろうとしないで、ただせりふを言ったり動作をしたりしている

Table 4 葛藤の評定段階と記述

項目番号	領域	活動名	評定段階	内 容
1	生活	片づけをするとき	a	気持ちよく過ごそうと、ていねいに片づけようとする気持ちを捨てずに最後まで片づける
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	先生にほめられたいという気持ちや先生や友だちに注意されるのが嫌という気持ちなどから片づけを行う
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	片づけなければいけないという気持ちが少なく、いいかげんに片づけをしたり、ときには片づけをしなかったりする
2	生活	※当番活動のやり方について友達や先生から注意されたとき	a	自分のやり方と友だちや先生の教えてくれたやり方を自分なりにつなげて、よりよくしようとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	自分のやり方は捨てて、友だちや先生の注意に従って行う
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	友だちや先生の注意を聞かないで、自分のやり方のみを主張する
3	生活	水が冷たいときや順番にならんだりして手を洗うとき	a	気持ちよく過ごすために手を洗う(食事を気持ちよく食べるため等)
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	先生や友だちに注意されるのが嫌で手を洗う
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	先生や友だちに注意されて、(はじめて)手を洗う
4	自由な遊び	ままごと遊びで役をきめるとき	a	自分のしたい役や、したくない役を主張するが、友だちの意見も聞いて、役を決めようとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	友だちに言われたとおりに役を引きうける
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	自分のしたい役がうけいれられなかったりすると役を引きうけない
5	自由な遊び	鬼ごっこのルールをかえようとするとき :遊びの名前( )	a	自分や友だちのことを考えてルールを変えようとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	友だちの変えたルールにしたがう
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	自分の主張したルールが受けいれられなかったり友だちがルールを変えたりすると、遊びをやめる
6	自由な遊び	砂遊びで遊具を借りるとき	a	友だちとやりとりしながら、遊具を借りようとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	貸してもらえにくそうなときは、あきらめてがまんをする
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	強引に借りようとしたり、貸してもらえないときは、遊びをやめたりする
7	課題活動	先生から学級全体でゲームを行うようにいわれたとき	a	自分のしたいことを大切にしながらもゲームに積極的に参加し楽しむ(ゲーム後、自分のしたい活動に従事する)
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	自分のしたいことはあきらめて、ゲームに消極的に参加する
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	自分のしたい活動を行い、ゲームに関心を示したり参加したりすることがない
8	課題活動	絵や製作活動などで	a	自分の表現の仕方なかに、先生の指導や友だちの工夫などをとり入れて自分の表現を高めようとする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	先生の指導や友だちの工夫を取り入れるが、自分なりの取り組みがみられない
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	自分だけの表現の仕方終始したり、ときには自分は下手だからといって、取り組みなかつたりする
9	課題活動	劇的な活動で自分の出番を終わり友だちとふざけたいとき	a	緊張を解きほぐしたいが、友だちのことを考えてふざけるのをがまんする
			b	aとcとが半分ぐらい
			c	先生や友だちに注意されると困るので、ふざけないようにしている
			d	cとeとが半分ぐらい
			e	まわりのことをまったく考えないでふざけてしまう

※ 先生の手伝いも含む

Table 5 幼児の主体性の評定項目の因子パターン

項目	因子1	因子2	因子3	共通性
信頼感 No. 1 No. 2 No. 3 No. 4 No. 5 No. 6 No. 7 No. 8 No. 9	0.57			0.38
	0.49		0.38	0.39
	0.46			0.24
	0.42		0.53	0.47
	0.47	0.41		0.44
	0.47	0.36		0.42
	0.43			0.28
			0.54	0.30
	0.66			0.52
イメージNo. 1 No. 2 No. 3 No. 4 No. 5 No. 6 No. 7 No. 8 No. 9	0.53		0.47	0.55
			0.49	0.32
			0.72	0.61
		0.81		0.66
		0.62		0.42
		0.63		0.48
		0.59		0.40
		0.81		0.73
		0.51		0.51
葛藤 No. 1 No. 2 No. 3 No. 4 No. 5 No. 6 No. 7 No. 8 No. 9	0.66		0.46	0.66
	0.46		0.36	0.39
			0.70	0.55
			0.38	0.28
	0.31	0.31		0.25
	0.47	0.34		0.40
			0.49	0.35
		0.58	0.31	0.46
	0.66		0.34	0.56
寄与率 %	67.6	22.0	10.5	

注)因子負荷量は0.30以上が記載されている。

### (2)項目の識別力

各項目の点双列相関係数を算出し、その結果をTable 6(1回目)とTable 7(2回目)に示した。

一般的に、負の値や0.2以下の項目は、識別力を持たないとされている(海保, 1985)。この観点からみると、Table 6の1回目の結果におけるイメージのNo. 5を除き、各項目とも識別力のあることが読み取れる。なお、このNo. 5の項目は、Table 7の2回目では高い点双列相関係数を示している。

### (3)尺度の信頼性

1回目と2回目の得点の相関係数を下位尺度別に算出し、その結果をTable 8に示した。

Table 8から分かるように、年齢別および全体において、いずれの相関係数も0.1%水準で有意であり、高い再検査安定性が認められたと考えてよいであろう。

Table 6 1回目の点双列相関係数

下位尺度	No.	点双列相関係数 4歳児	点双列相関係数 5歳児	点双列相関係数 全体
信 頼 感	1	0.453	0.582	0.562
	2	0.357	0.521	0.447
	3	0.456	0.433	0.460
	4	0.632	0.505	0.577
	5	0.642	0.463	0.529
	6	0.609	0.528	0.565
	7	0.492	0.389	0.456
	8	0.297	0.302	0.269
	9	0.680	0.614	0.611
イ メ ジ	1	0.465	0.394	0.459
	2	0.626	0.354	0.510
	3	0.436	0.318	0.420
	4	0.525	0.669	0.611
	5	0.189	0.659	0.614
	6	0.571	0.658	0.509
	7	0.512	0.553	0.614
	8	0.438	0.679	0.667
	9	0.651	0.636	0.703
葛 藤	1	0.514	0.581	0.622
	2	0.211	0.559	0.552
	3	0.492	0.496	0.533
	4	0.599	0.573	0.603
	5	0.509	0.569	0.599
	6	0.568	0.548	0.621
	7	0.542	0.438	0.473
	8	0.574	0.444	0.529
	9	0.623	0.554	0.560

う。

### (4)下位尺度の等質性

各下位尺度ごとの等質性を検討するために、1回目と2回目の得点の $\alpha$ 係数を算出し、その結果をそれぞれTable 9とTable 10に示した。

一般的に、この係数は、0.7程度以上あれば、内



Table 7 2回目の点双列相関係数

下位尺度	No.	点双列相関係数 4歳児	点双列相関係数 5歳児	点双列相関係数 全体
信 頼 感	1	0.656	0.685	0.673
	2	0.527	0.522	0.513
	3	0.406	0.470	0.415
	4	0.719	0.644	0.675
	5	0.542	0.538	0.537
	6	0.386	0.558	0.481
	7	0.563	0.660	0.615
	8	0.442	0.421	0.424
	9	0.672	0.618	0.642
イ メ ジ	1	0.450	0.445	0.453
	2	0.429	0.558	0.504
	3	0.476	0.481	0.483
	4	0.717	0.681	0.689
	5	0.504	0.617	0.569
	6	0.658	0.697	0.637
	7	0.673	0.693	0.475
	8	0.675	0.707	0.695
	9	0.632	0.646	0.638
葛 藤	1	0.635	0.738	0.693
	2	0.708	0.566	0.623
	3	0.579	0.605	0.583
	4	0.657	0.645	0.649
	5	0.676	0.550	0.604
	6	0.604	0.621	0.612
	7	0.512	0.624	0.563
	8	0.647	0.621	0.629
	9	0.646	0.699	0.671

部一貫性があると考えられる。この観点から Table 9 と Table10の結果をみると、年齢別および全体において、いずれの係数値も0.7以上なので、各下位尺度とも高い等質性がみられたと考えてよいであろう。

(5)項目の難易度

Table11は、1回目の各項目の平均値を示し、

Table 8 再検査法による相関値

下位尺度 年齢	信頼感	イメージ	葛藤	全体
4歳児	0.552	0.562	0.570	0.556
5歳児	0.594	0.553	0.582	0.607
計	0.588	0.565	0.561	0.595

注) いずれの相関値も0.1%水準で有意である

Table 9 1回目のα係数

下位尺度 年齢	信頼感	イメージ	葛藤
4歳児	0.815	0.798	0.814
5歳児	0.794	0.834	0.826
計	0.807	0.851	0.848

Table10 2回目のα係数

下位尺度 年齢	信頼感	イメージ	葛藤
4歳児	0.835	0.856	0.883
5歳児	0.848	0.874	0.882
計	0.839	0.863	0.880

Table12は、2回目の各項目の平均値を示している。

Table11からは、困難度の高いと思われる項目は、特に見当たらないが、容易な項目として、信頼感 No. 2, 8, イメージ No. 2, 3, 葛藤 No. 3, 7 をあげることができる(いずれも、全体平均値4.0以上)。これらの項目の年齢別、男女別数値をみると、いずれにおいても4.0以上の平均値を示しているのは、信頼感 No. 2, 8, 葛藤 No. 7 の3項目である。このように一部の項目が高い得点となったのは、評定記述の内容自体が4歳児や5歳児にとってやさしい(すでに達成した)ものであったかもしれない。今後、検討すべきことである。なお、これらの3項目については、得点がたしかに高いが、それほど極端な高さではないこと、また尺度全体におけるこれら

Table 11 1回目の各項目の得点の平均値とSD

下位 尺度	No.	全体平均 (SD)	年齢(SD)		男女(SD)	
			4歳児	5歳児	男児	女児
信 頼 感	1	3.34(1.27)	3.05(1.32)	3.59(1.17)	3.67(1.25)	3.61(1.24)
	2	4.28(0.98)	4.10(1.13)	4.44(0.80)	4.15(1.05)	4.41(0.90)
	3	3.95(0.99)	3.86(1.06)	4.02(0.92)	3.80(1.01)	4.10(0.95)
	4	3.70(1.21)	3.33(1.36)	4.00(0.96)	3.53(1.26)	3.86(1.13)
	5	3.51(0.95)	3.35(1.04)	3.63(0.85)	3.33(0.93)	3.67(0.94)
	6	3.70(1.14)	3.49(1.23)	3.87(1.03)	3.50(1.15)	3.88(1.11)
	7	3.19(1.46)	2.83(1.62)	3.41(1.30)	3.00(1.51)	3.37(1.39)
	8	4.30(0.95)	4.27(1.02)	4.32(0.89)	4.18(1.01)	4.42(0.86)
	9	3.61(0.91)	3.50(0.90)	3.67(0.92)	3.35(0.94)	3.86(0.82)
	小計	3.80(0.65)	3.62(0.70)	3.88(0.65)	3.61(0.66)	3.98(0.59)
イ メ ジ	1	3.64(1.28)	3.34(1.35)	3.90(1.16)	3.28(1.27)	4.00(1.19)
	2	4.19(1.01)	3.86(1.14)	4.47(0.77)	4.00(1.10)	4.37(0.87)
	3	4.15(0.96)	3.88(1.05)	4.37(0.81)	3.83(0.99)	4.45(0.82)
	4	3.65(1.11)	3.42(1.25)	3.84(0.94)	3.66(1.17)	3.63(1.05)
	5	2.94(1.36)	2.46(1.39)	3.29(1.22)	2.80(1.35)	3.06(1.36)
	6	3.86(1.06)	3.90(1.12)	3.83(1.01)	3.70(1.04)	4.00(1.05)
	7	3.59(1.14)	3.23(1.22)	3.81(1.03)	3.55(1.24)	3.63(1.04)
	8	2.86(1.33)	2.21(1.30)	3.30(1.15)	2.76(1.38)	2.96(1.27)
	9	3.19(1.09)	2.55(1.03)	3.48(0.99)	2.99(1.15)	3.38(0.99)
	小計	3.60(0.75)	3.11(0.67)	3.81(0.67)	3.43(0.80)	3.75(0.66)
葛 藤	1	3.31(1.26)	2.89(1.29)	3.68(1.11)	2.98(1.26)	3.63(1.17)
	2	3.45(1.11)	2.85(1.05)	3.94(0.91)	3.27(1.16)	3.61(1.04)
	3	4.23(1.06)	3.89(1.25)	4.53(0.74)	3.96(1.14)	4.50(0.88)
	4	3.25(1.23)	3.02(1.34)	3.43(1.11)	3.04(1.20)	3.44(1.24)
	5	3.09(1.08)	2.86(1.21)	3.27(0.94)	2.96(1.11)	3.21(1.05)
	6	3.35(1.22)	2.97(1.28)	3.67(1.06)	3.21(1.25)	3.49(1.17)
	7	4.39(0.84)	4.30(0.88)	4.46(0.81)	4.34(0.90)	4.44(0.78)
	8	3.62(1.15)	3.52(1.17)	3.69(1.13)	3.40(1.23)	3.83(1.03)
	9	3.62(1.02)	3.61(0.96)	3.62(1.06)	3.31(1.14)	3.90(0.79)
	小計	3.60(0.73)	3.26(0.75)	3.81(0.64)	3.39(0.75)	3.80(0.66)

Table 12 2回目の各項目の得点の平均値とSD

下位 尺度	No.	全体平均 (SD)	年齢(SD)		男女(SD)	
			4歳児	5歳児	男児	女児
信 頼 感	1	3.86(1.10)	3.69(1.12)	4.00(1.08)	3.59(1.10)	4.13(1.04)
	2	4.69(0.59)	4.72(0.59)	4.66(0.59)	4.62(0.68)	4.76(0.47)
	3	4.44(0.79)	4.63(0.73)	4.28(0.80)	4.40(0.81)	4.48(0.77)
	4	4.02(1.04)	3.84(1.07)	4.16(1.00)	3.77(1.07)	4.26(0.96)
	5	3.96(0.95)	3.96(1.00)	3.95(0.90)	3.82(0.99)	4.10(0.89)
	6	4.12(0.96)	3.98(1.03)	4.24(0.88)	3.92(1.01)	4.31(0.86)
	7	4.13(1.11)	4.03(1.19)	4.22(1.04)	3.98(1.19)	4.29(1.00)
	8	4.55(0.83)	4.59(0.89)	4.51(0.78)	4.42(0.91)	4.68(0.72)
	9	4.20(0.93)	4.11(1.00)	4.27(0.87)	3.93(0.96)	4.47(0.81)
	小計	4.21(0.62)	4.15(0.64)	4.25(0.60)	4.03(0.65)	4.39(0.53)
イ メ ジ	1	4.27(0.91)	4.11(0.97)	4.42(0.82)	4.05(0.92)	4.51(0.83)
	2	4.51(0.76)	4.46(0.81)	4.55(0.71)	4.39(0.79)	4.64(0.70)
	3	4.42(0.81)	4.26(0.91)	4.55(0.69)	4.14(0.87)	4.71(0.63)
	4	4.15(0.97)	4.14(1.00)	4.16(0.94)	4.11(1.02)	4.19(0.91)
	5	3.51(1.18)	3.20(1.24)	3.76(1.08)	3.48(1.17)	3.54(1.20)
	6	4.25(0.87)	4.34(0.94)	4.18(0.80)	4.10(0.95)	4.40(0.75)
	7	4.04(1.04)	4.02(1.07)	4.05(1.01)	3.90(1.13)	4.18(0.91)
	8	3.58(1.18)	3.42(1.26)	3.70(1.11)	3.56(1.23)	3.59(1.14)
	9	3.88(0.99)	3.71(1.11)	4.02(0.86)	3.70(1.01)	4.06(0.95)
	小計	4.10(0.65)	4.01(0.11)	4.16(0.64)	3.96(0.69)	4.24(0.58)
葛 藤	1	3.89(1.10)	3.73(1.17)	4.02(1.02)	3.52(1.11)	4.27(0.96)
	2	4.08(0.90)	3.93(0.90)	4.21(0.88)	3.92(0.95)	4.25(0.81)
	3	4.37(0.94)	4.20(1.04)	4.52(0.82)	4.10(1.05)	4.66(0.70)
	4	3.78(1.25)	3.69(1.34)	3.85(1.17)	3.54(1.28)	3.99(1.18)
	5	3.54(1.03)	3.46(1.12)	3.61(0.96)	3.41(1.07)	3.68(0.97)
	6	3.85(1.12)	3.79(1.23)	3.91(1.02)	3.69(1.18)	4.00(1.05)
	7	4.43(0.94)	4.53(0.83)	4.35(1.02)	4.30(1.08)	4.56(0.77)
	8	4.02(1.06)	4.04(1.06)	4.00(1.07)	3.77(1.20)	4.28(0.83)
	9	3.83(1.15)	3.80(1.01)	3.85(1.21)	3.43(1.21)	4.24(0.93)
	小計	3.98(0.76)	3.92(0.79)	4.03(0.74)	3.71(0.79)	4.20(0.65)

注) 小計の平均は、各項目の評定人数が異なるためそれらの項目の単純平均値にならない。Table12, 13についても同じ。

の項目の位置づけなどを考えて、このまま残すことにする。

2 回目の結果を示す Table12を見ると、さらに各項目とも得点が高くなり、全体平均値で4.0以上となる項目は、計16項目にのぼる。このような変化は、約8か月経過して、主体性が全般的に発達したためと理解できるが、これについては次に述べる。

**(6) 1 回目から 2 回目への変化**

各項目の変化量(2 回目の得点から 1 回目の得点を引いたもの)を Table13に示す。

Table13から理解できることは、①ほとんどの項目において、1 回目よりも 2 回目において得点が高くなっている、②全体的には、得点の変化量が0.06(葛藤 No. 7)~0.87(信頼感 No. 7)に分布している、③年齢別にみると、4 歳児の得点の変化量は0.30(葛藤 No. 9)~1.35(イメージ No. 8)に分布し、5 歳児の得点の変化量は-0.13(葛藤 No. 7)~0.83(信頼感 No. 7)に分布している、④男女別にみると、男児の得点の変化量は-0.01(葛藤 No. 7)~0.98(信頼感 No. 7)に分布し、女児の得点の変化量は0.14(葛藤 No. 7)~0.75(信頼感 No. 7)に分布している、などである。

**(7) 年齢別にみた下位尺度の得点**

Table14は、1 回目の下位尺度の年齢別平均値を示している。

Table14から、いずれの下位尺度とも、0.1%水準で、5 歳児が4 歳児よりも高い得点を示していることが理解できる。

Table15は、2 回目の下位尺度の年齢別平均値を示している。Table15から、イメージにおいて5%水準で5 歳児が4 歳児よりも高い得点を示しているが、信頼感や葛藤においては、そのような有意差は得られていない。

Table16は、2 回目から 1 回目の得点を引いた年齢別の変化量を示している。Table16において、いずれの下位尺度とも、4 歳児の変化量が5 歳児の変化量よりも統計的に有意差をもって大きいことが理解される。このことから、5 歳児においては、一定の天井効果がみられると考えられる。

**(8) 年齢別にみた男女の比較**

Table17は、4 歳児の 1 回目の男女別の得点を示している。

Table17から、いずれの下位尺度においても、女児が男児よりも有意差をもって高い得点を示すことが分かる。

Table 13 各項目の変化量の平均値と SD

下位 尺度	No.	全体平均 (SD)	年齢(SD)		男女(SD)	
			4 歳児	5 歳児	男児	女児
信 頼 感	1	0.49(1.29)	0.63(1.34)	0.38(1.24)	0.51(1.45)	0.47(1.12)
	2	0.41(0.97)	0.63(1.13)	0.23(0.75)	0.48(1.07)	0.35(0.84)
	3	0.52(0.91)	0.81(0.92)	0.27(0.81)	0.61(0.99)	0.42(0.82)
	4	0.32(1.19)	0.60(1.32)	0.15(1.05)	0.29(1.40)	0.40(0.96)
	5	0.47(1.04)	0.69(1.14)	0.30(0.93)	0.49(1.03)	0.45(1.06)
	6	0.45(1.14)	0.57(1.28)	0.34(1.00)	0.41(1.27)	0.48(1.00)
	7	0.87(1.38)	0.93(1.56)	0.83(1.27)	0.98(1.58)	0.75(1.13)
	8	0.33(1.05)	0.53(1.06)	0.60(1.05)	0.62(1.13)	0.53(1.00)
	9	0.58(1.06)	0.52(1.06)	0.60(1.05)	0.62(1.13)	0.53(0.97)
	小計	0.40(0.58)	0.51(0.66)	0.36(0.54)	0.42(0.68)	0.39(0.46)
イ メ ジ	1	0.62(1.17)	0.81(1.27)	0.47(1.06)	0.75(1.30)	0.50(1.01)
	2	0.37(1.00)	0.63(1.12)	0.14(0.83)	0.42(1.15)	0.31(0.83)
	3	0.28(0.96)	0.39(1.10)	0.19(0.82)	0.31(1.13)	0.25(0.76)
	4	0.46(1.08)	0.72(1.14)	0.29(1.01)	0.41(1.21)	0.51(0.95)
	5	0.58(1.34)	0.80(1.64)	0.42(1.05)	0.66(1.27)	0.50(1.40)
	6	0.39(0.96)	0.49(0.91)	0.32(0.99)	0.38(1.06)	0.41(0.85)
	7	0.42(1.18)	0.72(1.09)	0.25(1.19)	0.35(1.46)	0.48(0.80)
	8	0.78(1.37)	1.35(1.53)	0.42(1.11)	0.83(1.46)	0.74(1.28)
	9	0.71(1.07)	1.12(1.02)	0.54(1.05)	0.79(1.18)	0.62(0.95)
	小計	0.41(0.64)	0.57(0.65)	0.33(0.62)	0.43(0.77)	0.40(0.50)
葛 藤	1	0.57(1.11)	0.88(1.14)	0.31(1.03)	0.52(1.24)	0.61(0.97)
	2	0.60(1.10)	1.01(1.23)	0.26(0.84)	0.63(1.23)	0.56(0.94)
	3	0.17(1.20)	0.37(1.48)	0.00(0.85)	0.14(1.52)	0.19(0.73)
	4	0.50(1.34)	0.62(1.40)	0.40(1.28)	0.47(1.42)	0.52(1.27)
	5	0.44(1.16)	0.62(1.32)	0.32(1.02)	0.40(1.29)	0.49(1.02)
	6	0.49(1.21)	0.77(1.20)	0.27(1.17)	0.49(1.38)	0.49(1.04)
	7	0.06(1.12)	0.35(0.91)	-0.13(1.21)	-0.01(1.31)	0.14(0.88)
	8	0.40(1.23)	0.52(1.14)	0.30(1.29)	0.37(1.50)	0.43(0.87)
	9	0.27(1.08)	0.30(1.14)	0.24(1.04)	0.19(1.23)	0.34(0.90)
	小計	0.34(0.68)	0.54(0.71)	0.20(0.63)	0.30(0.81)	0.39(0.54)

Table14 1回目の年齢別比較  
(得点平均値と(SD))

下位尺度 年齢	信頼感	イメージ	葛藤	全体
4歳児	3.62 (0.70)	3.11 (0.67)	3.26 (0.75)	3.25 (0.64)
5歳児	3.38 (0.61)	3.81 (0.67)	3.81 (0.64)	3.84 (0.57)
計	3.80 (0.65)	3.60 (0.75)	3.60 (0.73)	3.67 (0.65)
t検定 (4.5歳間)	t=3.98 P<0.001	t=10.41 P<0.001	t=8.62 P<0.001	t=9.69 P<0.001

Table17 4歳児の1回目の男女別比較  
(得点平均値と(SD))

下位尺度 性別	信頼感	イメージ	葛藤	全体
男児	3.47 (0.70)	2.88 (0.64)	3.02 (0.71)	3.02 (0.58)
女児	3.81 (0.67)	3.35 (0.62)	3.52 (0.70)	3.49 (0.62)
計	3.62 (0.72)	3.11 (0.67)	3.26 (0.75)	3.25 (0.64)
t検定 (男女間)	t=3.07 P<0.01	t=4.54 P<0.001	t=5.05 P<0.001	t=4.58 P<0.001

Table15 2回目の年齢別比較  
(得点平均値と(SD))

下位尺度 年齢	信頼感	イメージ	葛藤	全体
4歳児	4.15 (0.64)	4.01 (0.66)	3.92 (0.79)	4.05 (0.64)
5歳児	4.25 (0.60)	4.16 (0.64)	4.03 (0.74)	4.14 (0.61)
計	4.21 (0.62)	4.10 (0.65)	3.98 (0.76)	4.11 (0.62)
t検定 (4.5歳間)	t=1.80 P>0.05	t=2.47 P<0.05	t=1.58 P>0.05	t=1.60 P>0.05

Table18 4歳児の2回目の男女別比較  
(得点平均値と(SD))

下位尺度 性別	信頼感	イメージ	葛藤	全体
男児	4.05 (0.65)	3.96 (0.66)	3.76 (0.82)	3.95 (0.62)
女児	4.27 (0.61)	4.08 (0.66)	4.08 (0.73)	4.16 (0.64)
計	4.15 (0.64)	4.01 (0.66)	3.92 (0.79)	4.05 (0.64)
t検定 (男女間)	t=2.48 P<0.05	t=1.28 P<0.05	t=3.01 P<0.01	t=2.22 P<0.05

Table16 変化量の年齢別比較  
(得点平均値と(SD))

下位尺度 年齢	信頼感	イメージ	葛藤	全体
4歳児	0.51 (0.66)	0.57 (0.65)	0.54 (0.71)	0.75 (0.62)
5歳児	0.36 (0.54)	0.33 (0.62)	0.20 (0.63)	0.30 (0.53)
計	0.40 (0.58)	0.41 (0.64)	0.34 (0.68)	0.41 (0.58)
t検定 (4.5歳間)	t=2.23 P<0.05	t=3.74 P<0.001	t=5.54 P<0.001	t=6.52 P<0.001

Table19 5歳児の1回目の男女別比較  
(得点平均値と(SD))

下位尺度 性別	信頼感	イメージ	葛藤	全体
男児	3.69 (0.63)	3.70 (0.73)	3.65 (0.66)	3.69 (0.61)
女児	4.06 (0.53)	3.91 (0.60)	3.96 (0.57)	3.98 (0.58)
計	3.88 (0.61)	3.81 (0.67)	3.81 (0.64)	3.84 (0.57)
t検定 (男女間)	t=5.76 P<0.001	t=2.92 P<0.05	t=4.56 P<0.001	t=4.32 P<0.001

Table20 5歳児の2回目の男女別比較  
(得点平均値と(SD))

下位尺度 性別	信頼感	イメージ	葛藤	全体
男児	4.01 (0.65)	3.97 (0.72)	3.67 (0.76)	3.85 (0.66)
女児	4.47 (0.45)	4.32 (0.50)	4.32 (0.57)	4.37 (0.47)
計	4.25 (0.60)	4.16 (0.64)	4.03 (0.74)	4.14 (0.61)
t検定 (男女間)	t=7.01 P<0.001	t=4.96 P<0.001	t=8.04 P<0.001	t=7.22 P<0.001

Table18は、4歳児の2回目の男女別の得点を示している。

Table18から、いずれの下位尺度においても、女児が男児よりも高い得点を示しているが、イメージにおいては有意差が得られていない。

Table19は、5歳児の1回目の男女別の得点を示している。

Table19から、4歳児と同様に、5歳児においても、いずれの下位尺度において、女児が男児よりも有意差をもって高い得点を示すことが分かる。

Table20は、5歳児の2回目の男女別の得点を示している。2回目においても、1回目と同様に、女児が男児よりも有意差をもって高い得点を示すことが分かる。

以上のように、4歳児、5歳児において、女児が男児よりも高い得点を示しているが、実際に女児が男児よりも主体性の発達において高いレベルにあるかについては、さらに今後において、検討をしていかなければならない。

## 要約と課題

本研究は、幼児の主体性が、信頼感、イメージ、葛藤の3つの要素から構成されると仮定し、それらの要素を下位尺度とする教師評定尺度の作成を目的に行われた。

4歳児288名、5歳児334名の計622名を対象に、学年始めの6月と学年末の2月の2回にわたり尺度を実施した。その結果、次のようなことが見いだされた。

1 因子分析の結果、信頼感、イメージ、葛藤の要素にほぼ対応した因子構造が見いだされた。

2 各項目の点双列相関係数から、各尺度項目に識別力のあることが見いだされた。

3 再検査法により、1回目と2回目とに高い相関が認められ、尺度の信頼性が確認された。

4  $\alpha$ 係数による内部一貫性の検定により、いずれの下位尺度においても高い等質性が認められた。

5 項目の難易度については、得点の高い項目がいくつかあったが、全体的には妥当であった...

6 1回目から2回目への変化については、項目によって変化量の違いはあったが、全体的にはすべての項目においてプラスの変化を示した。

7 年齢の比較では、各下位尺度において5歳児が4歳児よりも高い得点を示した。

8 男女の比較では、各下位尺度において女児が男児よりも高い得点を示した。

本研究の尺度は、教師評定尺度である。幼児に自分の心の内面について自己報告を求めることが困難であることを考慮するならば、教師評定はやむをえない方法であろう。しかし、教師評定には問題点があることも気づいた。幼稚園やクラスによって子どもの主体性の発達に違いがあるのは事実としても、教師によって、評定にかなりの差異があった。ある教師は、ほとんどの子どもに高い評点を与えている。クラスの子どもの主体性の発達は、担任教師の指導の評価の一つの資料となるだけに、評定の際に多少のバイアスが負荷することも止むを得ないことかもしれない。この点で、あまりにも高い評点ばかりを与える教師評定を避けるような工夫が必要かもしれない。

最後に、本尺度の妥当性について、特に検討を行わなかった。幼児の主体性について、すでに認められているような測定用具がないので、妥当性の検討は困難を伴うと思われるが、今後の課題と言えよう。また、得点の基準の作成も、今後の課題としたい。

## 文 献

- 新井邦二郎 1973 知的行為の多段階形成理論 教育心理学研究 21, 3 56-61
- 新井邦二郎 1980 幼児期の思考の訓練—教えの立場と励ましの立場— 児童心理 34, 11 148-153
- 新井邦二郎 1988 発達心理学からみた幼稚園教育の問題 学校教育研究 No. 3 46-55
- Bruner, J.S.(鈴木・佐藤訳) 1960(1963) 教育の過程 岩波書店
- Bruner, J.S. et al.(岡本夏木他訳) 1966(1969) 認知能力の成長上・下 明治図書
- Erikson, E.H.(仁科弥生訳) 1950(1977) 幼児期と社会Ⅰ みすず書房
- Erikson, E.H.(小此木・岩尾・小川訳) 1959(1973)

- 自我同一性 誠信書房
- 平井信義他 1979 幼児の集団生活における個人差の検討—自主性の発達をめぐる— 日本保育学会第32回大会研究論文集 226-227
- 平井信義他 1980 幼児の集団生活における個人差の検討—幼児の自主性の発達に関する行動評定の検討— 日本保育学会第33回大会研究論文集 340-341
- 平井信義他 1981 幼児の集団生活における個人差の検討—就学前の幼児の行動観察による自主的行動の検討— 日本保育学会第34回大会研究論文集 84-85
- 平井信義他 1982 自主性・創造性の構造とその発達について—保育者の人格変容との関連において— 日本保育学会第35回大会研究論文集 162-163
- 石川勤・藤原喜悦 1968 自主性診断検査(DTI) 金子書房
- 海保博之編 心理・教育データ解析法10講—基礎編— 福村出版
- 森上史朗 1985 幼児理解と保育内容 ひかりのくに
- 大場牧夫 1971 幼稚園時代 日本放送出版協会
- Piaget, J.(谷村・浜田訳) 1936(1978) 知能の誕生 ミネルヴァ書房

- Piaget, J.(波多野・滝沢訳) 1947(1960) 知能の心理学 みすず書房
- 斎藤美智子他 1985 幼児の遊びと自主性の発達についての実験的研究・第1報告 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 304-305
- 斎藤美智子他 1986 幼児の遊びと自主性の発達についての実験的研究・第2報告 日本教育心理学会第28回総会発表論文集 92-93
- 斎藤美智子他 1988 幼児の遊びと自主性の発達についての実験的研究・第3報告 日本教育心理学会第30回総会発表論文集 334-335

#### [後記]

本研究に際して、多くの方々からご協力・ご援助をいただきました。特に、埼玉県南教育センターの宮腰 養、後藤かつ、埼玉県立鴻巣女子高付属幼稚園の秋山富子、杉戸町立幼稚園の福田多喜子、手塚三和、坂戸町立幼稚園の三芳淳子、新井初江、騎西町立幼稚園の坂庭美代子、筑波大学心理学系の丹羽洋子の各先生方に大変お世話になりました。記して、謝意を表します。また、クラスの子どもたちを2度も観察・評定していただいた担任の先生方にも深く感謝を申し上げます。